

ボビー・フィッシャーを探して

1 チェスの神童を育てて

一九八四年の春、ニューヨーク州シラキューズで行われた全米小学生チェスチャンピオン大会で、取り乱した父親が息子に指し手を小声で教えだした。体育館の床いっぱい、何十人もの保護者がチェス盤のすぐそばでひしめきあい、選手たち聞こえるのに心配そうに形勢を議論していた。六、七、八歳の児童のなかには、静かにしてよとか、ぼくの好きなようにやらせてよと保護者にたのむ子もいた。憤懣やるかたない父親が二人、押し合いを始め、片方が殴りかかった。そのうち、激怒した大会責任者が保護者全員に向かって、会場から出るように命令した。まもなくすると、外のホールでは百人以上の父母がそわそわと歩きまわることになった。興奮した保護者たちがいなくなって、子供たちはほっとしたに違いないが、こうして閉め出しを食らったことで、すでに熱に浮かされたようになっていた哀れな保護者たちの心配は余計に高まった。子供たちのために風通しを良くしようと、大会責任者がときどきドアをほんの少し開ける。するとたちまち、我が子の局面をなんとしてでも一目見ようと、何十人もの保護者が群がるのである。そしてそのなかの一人が私だった。

ジョッシュがまだ赤ん坊だったとき、私は息子が成長してバスケットボールのスター選手になり、

私が観客席から声援を送っている場面を夢想した。一緒に健康管理をして、アーネスト・ヘミングウェイの短篇『ぼくの父』に出てくるジョーとその父親のようにジョギングしている姿も。その代わりに、息子は今やチェスの選手なのだ。七歳で競技会に出るようになってから、息子は同年齢ではレーティング(選手の棋力を表示する点数)が全米一位になることがしばしばだった。私たちの家には、派手なトロフィーや、チェスの盤駒や、チェス時計、棋譜用紙、コンピュータ、さまざまな言語で書かれた棋書があふれるようになった。そして、このボードゲームに対する息子の早熟な能力が、すっかり私の空想を独占するようになった。かつての私の悩み事といえば、仕事であり、健康であり、結婚、友人、母親であったものだ。それが今ではジョシユアのチェスのことばかり。息子のレーティングが気になるし、チェスの宿題をしたかどうかが気になる。それに大会のことも気がかりになる。練習は充分にしただろうか？ やりすぎてはいないだろうか？ 以前だと、デスクに向かって執筆に取り組んでいるときに、よく夢想するのはニューヨーク・ニックスのことだったり、釣りに行くことだったりした。それが今では、頭の中で息子の棋譜を並べ直している。息子がじっと座っている行為が、人生の最優先事項の多くに取って代わったのだ。

ジョシユは運動がとても好きで、チェスの大会になるとラウンドのあいだにキャッチボールをしたがる。チェスの駒と鉛筆をしまうときに、こう言うのが私の務めだ。「だめだよ、ジョシユ。くたくたになりたくないだろ。序盤オープニングの再確認でもしたらどうなんだ？」学童大会だと、彼はたいてい一番ボードに座ることになり、私の小さな息子と指すことになった他の子供は心底うんざりすることもときどきある。彼らの保護者が私に接する態度も丁重で、まるで私が何か大したことをや

つたようなそぶりだ。身長はわずか百七センチで、座って黙々と考えている息子の、キャディ兼コーチであるというのは、父親にとって妙な立場だ。

ジョッシュと初めてチェスを指したのは、居間に置かれていらずんぐりしたコーヒーターブルの上で、息子が六歳のときだった。息子は床に座り、顔を両手に載せ、危険だが魅力的な森の中をのぞき込むような目つきで、ちょうど目と同じ高さにある木の駒を見つめていた。こちらが教えようとするのを頑固に拒否して、もっぱら試行錯誤しながら、息子は私の駒を畏にはめる巧妙な手段を見つけた。幾世紀にもわたって競技者たちが使ってきた、標準的な作戦や戦略を自分で掘り起こした。初めて覚えたゲームなのに、上手だったのだ。

上手すぎて、私は息子が何歳なのかよく忘れた。複雑な戦いにのめり込み、息子の首を討ち取ってやりたいと思っているのに気づくこともしばしばだった。息子のかわいい攻撃をロンドルのようにかわし、打ちのめしてやる。するとジョッシュは拳を振り上げ、しかめっ面をしてまた向かってきた。「ぼくは絶対に勝つ、勝つてやる」と息子はつぶやきながらまた駒を並べる。自分が最高の手を指しているつもりなのに負かされるのは、不思議でならなかったのだろう。二度ほど私がナイト落ちを提案したら、まるで恥をかかされたみたいに、私の厚かましさに抗議の泣き声をあげたこともある。親父は三流で、チェス用語で言う「ベボバツパー」なのを、もうすでにわかっていたらしい。

私はジョッシュをはずたずたにしようとする一方で、息子に勝ってもらいたいと声援を送っていた。対局は私たちにとって激情の流砂となった。くやしい負けを喫した後で、息子はどうやってことのないようなそぶりを見せたが、そのくせ下唇が震えているのだった。がっかりして自分の部屋に帰る

息子の姿を見ると、心が痛んだ。練りに練った末の勝利も、まるで敗戦のように思えた。翌日になると、息子はもう指したくないと言う。たとえ、新しいおもちゃの車を買ってやるよと言っても——キャンディでも。私はパニック状態になった。もしかしたら、この前の一戦で猛攻をかけたときに、世界チャンピオンになるという幼い夢を殺してしまったのかもしれない。あるいはもしかすると、それは息子の夢ではなく、私の夢なのか。父親と幼い息子のあいだでは、そのような区別は曖昧だ。こうやって親父が息子をめっちゃめっちゃにしてしまうんだぞ、と私は自責した。バットを振ることを覚えたばかりの六歳児にスライダーを投げるか？ 腹にめり込むようなボデイブローを浴びせるか？ それでも、また数日たつと私たちはチェス盤に向かった。あるとき、クイーンが罠にかかった後で、ジョッシユはグランドマスターになりたくないと言い切った。「大変すぎるもの」と彼は言った。悪い気がして、それじゃ代わりに何になるんだいと私はたずねた。すると息子は、パックマンのゲーム機が置いてあるピザ店で働く、とまじめくさった顔で答えた（私がどれほどテレビゲームを嫌っているか、わかっていたのだ）。

振り返って考えると、ジョッシユはチェスの心理作戦家としてちようど肩慣らしを始めたところで、私に対して懐柔作戦を取っていたのだと思う。それというのも、次の日の午後になると、息子はやる気満々で、短い腕を盤のむこうに伸ばしてポーンを取ろうとするときに、決まって駒を叩き落としていたからだ。その日、私はまるでカルポフ☆になったような気分で、受けようのない攻撃を慎重に組み立てていった。一戦は長く続き、息子が考慮中に、私は軽くシャワーを浴びた。タオルで身体をぬぐっていると、待ちきれないという口ぶりでジョッシユが私を呼んだ。私は缶ビールを

つかみ、局面を検討して一手指した。するとジョッシュはにつこり笑い、ルークを進めて「二手でメイト」と宣言した。

「さあどうかな」と私は余裕たつぷりに言ったが、どう指しても逃れられない。やられた。私は息子を抱きしめた。そして二人で床の上に転がり、声をあげて笑った。息子が私を負かしたのは、それが初めてだった。

数カ月後、ジョッシュにもっと強い相手を見つけてやろうと、私たち夫婦はアパートから歩いて行ける距離にある、十丁目のマーシャル・チェスクラブに息子を連れていった。チェスクラブに入ると、古いヴィクトリア朝風の家具や、磨かれていない羽目板造りの床に、埃までもが、過去にそこで指された名局を反響していた。しかし午後遅くの影の中では、チェス史のたしかかな手触りも六歳のジョッシュには何の印象も与えないらしく、上級者が二人、ブリッツと呼ばれる早指しをやっているのを眺めながら、ビニール袋からクマさんの形をしたグミを取り出していた。妻と私が席主とおしゃべりしているあいだ、対局者が目にも止まらぬ速さで駒を動かし、着手の後で代わる代わる勢いよく対局時計を押すのを見て、息子はクスクス笑っていた。

席主が丁寧な口調で教えてくれたところによれば、マーシャル・チェスクラブにはこれまで六歳の会員がいたことはなく、六、七年たって、腕が上達し、棋書を読める年齢になってからまた連れてくるのが賢明ではないかとのことだった。いつのまにか、ジョッシュはぶらりと部屋の片隅に行っていた。そこでは、顔色の悪い青年が彫り込みになったオークとマホガニー製のチェス・テーブル

ルに向かい、ペトロフ戦法の定跡書を見ながら、白黒双方の指し手を黙々と並べていた。いわばチエスの無言劇だ。ジョッシュにはそれがどういふことだかわからなかった。この人は空想しているのかな、相手が竜やスーパーヒーローだと思つて。しばらくして、息子が元氣よく「指す？」と声をかけると、青年はぼうつとした表情で顔を上げた。

数分後、幼い息子は駒を見渡せるように電話帳を尻に敷いて座り、指し手をボンと進めながらグミをクチャクチャやつていた。驚いたことに、対局は一時間が経過してもまだ続いていて、その頃にはクラブの会員たち五、六人がテーブルのまわりに群れをなして観戦していた。わずかにポーン一個損のジョッシュは、ほとんどノータイムで指して、攻撃をかわし、それからそわそわして、窓の外を見たり、気まづいながらも自慢そうな両親に向かつておどけた顔を見せたりしながら、相手が指すのを待つていた。青年は真空の中で対局しているようだった。着手を決めるたびにチエス史を精査しているようで、ちっちゃな対戦相手の方をちらりと見ることもなかった。

「もらつたよ」とジョッシュがポーンを進めながら、決め手だと言わんばかりに宣言した。青年は一瞬当惑したようで、それからまるで平手打ちを食らつたみたいに顔を紅潮させた。会員の一人が興奮を抑えきれずにささやいた。「ルークのただ取りか！」そのポーンは開き王手で動いたものだった。ジョッシュのビショップでキングにチェックがかかつていて、キングが逃げると、ルークが取られてしまう。

青年は髪に手をやり、苦悶の表情を見せた。そして五分考えてから、テーブルのむこうのジョッシュに手を差し出した。息子はその仕草に不思議そうな顔をした。また投了の儀式を知らなかった

のだ。

七歳になった頃には、もうジョッシュは父親よりはつきりと強く、合衆国チェス連盟のレーティングでは全米のトーナメント・プレーヤー（公式団体に所属して競技会に出場するプレーヤー）の半数よりも上になっていた。私が息子に粉砕されることを友人たちが観戦することもときどきあった。連中は首を振り、私は親としての誇りで喜色満面になる。しかしその日の夜になると、今度はどんな新しい序盤戦法を使つてやろうかと、私は定跡書を研究したものだ。息子のチェスの才能がどういいうわけか大きく芽生えて、すっかり有頂天になっていたが、それでも息子が私よりも正確に三倍の速さで駒交換の損得を計算できるのは、なんとも落ちつかないものだったのである。私は立て続けに負かされた。息子に負けると、自分が年寄りで頭が悪いような気分になった。ナイトを落とそうかと息子が初めて提案したときに、まるでそれがひどく礼を失した態度であるかのように、私は烈火のごとく怒った。息子が平然と私の駒を罫にかけたときに、地面に組み敷いて両腕を押さえつけてやろうかと思ったこともしばしばある。

八歳になるずっと前に、ジョッシュは親父とは完全にレベルが違うことを知って、私と指すときに本気になることをやめた。私がありとあらゆる可能性を慎重に読んでいるあいだ、息子は本をめぐったり、窓の外を見たり、ガムを噛んだり、母親とおしゃべりしたり、ジョークを飛ばしたり、足をトントンと鳴らしたり、ためいきをついたりした。こういいうい加減な態度で指しているときに、息子はたいてい負けた。私はナイトやビショップをただで取った。紐のついていないクイーン

を頂戴されても、息子はそれがどうなの、つまんない、と言わんばかりにあくびをした。私は頭にくきた。チェスプレーヤーらしい理屈と悪知恵を発揮して息子が言うには、ぼくはまだ七歳なんだから、お父さんに負けてもかまわない、というわけだ。ときどき、息子がうっかり駒損すると、私は堪忍袋の緒が切れて駒を盤からぜんぶ払いのけたこともあった。こちらは負かされたいのに、息子がまったくその気になつてくれない。あるとき、憤懣だらけの一戦の後で、チェスだけが人生じゃないとよく言っている妻がこう言った。「わからないの？ この子はお父さんを負かしたくないのよ」その一言で、私は立ち止まった。勝負に夢中になるあまり、息子が親父をアリののように踏みつぶしてしまうことにはばつの悪さを感じているかもしれないとは、思ってもみなかったのである。

その後で、ジョッシユと私はめつたにチェスを指さなくなつた。その代わり、私は息子がチェスのレッスンを受けているところを見たり、強い相手を求めて息子をワシントン広場の公園や大会に連れていったりした。チェスのコーチ兼ファンという新しい役割になつてみると、私はジョン・マッケンローの父親や私たちのような他の保護者たちに対して、ねたみまじりの敬意とまではいかなくても、共感を覚えるようになった。彼らは、自分自身にはその道の才能がない世界に思いがけずも吸い込まれてしまった、悩み多き観戦者や世話焼きたちの連帯組織なのである。

ジョッシユはやんちゃな男の子で、ハンサムであり、豊かな茶色の髪に、母親譲りの茶色い目、そしてがっしりした身体つきをしていた。三歳の頃から私をフレッドと呼ぶようになり（こちらとしてはパパと呼んでもらいたいところだったが）、夕方になると私が仕事を終えるのを待ちこがれて、まるでアパートの前にある街灯の下で彼にパスを出すのが私の存在理由であるかのようにだった。夕

食がすむと居間の床でレスリングをしようと思がみ、寝る時間になるまでまだ何分残っていると最後の最後までうるさく言った。学校の友達から見れば、彼はバスケットアメフト好きで、大食いで、算数が得意な子だが、もっと目立つのは教室でのお茶目ぶりで、宿題をいい加減にしかやらないし、はめをはずして悪ふざけするので、しばしば先生の忍耐力が試されることになる。キックボールをやらせれば憎らしいほどだし、人をからかうのが好きで、キャンディに目がなく、ハーディ兄弟もの（アメリカで人気のある子供向けの物語）の大ファンのくせに、ホラーやカンフーものの映画となると怖がりだ。そうした目から見れば、ジョッシュがチェスを指すのは、大きなトロフィーをもたらず漠然とした活動としか映らない。ある日の午後、二年担任の先生と懇談していて、ボニーと私はジョッシュがチェスに特殊な才能を持っていることをなんとか説明しようとした。こちらがしゃべっていると、女の先生は足踏みしていた。椅子にじっと座ってられない、読み書きが苦手な子とは別人について私たちが話しているみたいだった。先生もぜひ公園に行つて、うちの子が指しているところをごらんになってください、と私たちは懇願した。いつもだとチェスプレーヤーには見えないが、ひとたび盤の前に座ると、身体が少しこわばり、顔つきもおだやかになって年齢がわからなくなる。幼い少年はしばらくどこかへ消え去り、ジョッシュはいにしえから伝わる難解な思考にふけるのだ。

チェスづきあいの外的の世界では、私がジョッシュのチェスに入れ込んでいるのは奇妙な自堕落だと思られることもしばしばである。息子は幅の広い生活をしているが、少年野球をする時間はまるでないのだと私が説明しようとすると、息子の友達の保護者は無言のまま厳しい非難の表情になる。

「息子さんには何をさせてるんですか？ チェス？ ピアノとかテニスのレッスンを受けさせなさいよ、スティックボールをやらせるとか、もつとヤンキースの試合を見に行かせたらいいのに。それで、宗教教育はどうなんです？ 大会があるからシナゴグの日曜学校に行く暇がないって？」

こういった非難がましい言葉を聞くと、私も動揺して、間違ったことをしているんだらうかという気になる。もしかするとジョッシュは本当はチェスが好きじゃないのかもしれない、と私は自分に言い聞かせる。ひよつとしたら押しつけているのかも。チェスをどう思うとたずねたら、息子は肩をすくめてみせる。テレビゲームの方がもつと好きだということなのか。とはいえ、何が好きか、八歳の子供が言うことはあてにならないのではないか。私は親である。息子にとって何がいちばんいいか、決めるのはこの私だ。しかし、いちばんいいこととは何だろう？ 午後に幾度となく、ジョッシュはチェス盤に向かい、窓の下で自転車に乗って騒いでいる少年たちの誘惑の声に耳をふさいでいる。私が七歳の頃、もし私の父がそんなことを命令したら、きっと泣きわめいていただろう。とはいえ、父は小さなジョン・マッケンローを育てているわけではなかった。

週に一、二度、ジョシユアのチェスの先生であるブルース・バンドルフィーニが朝の六時半にアパートにやってくる。すると息子は、まだ幼い妹と同じような寝ぼけ顔をして、パジャマ姿でベッドから飛び起きる。しかし数秒もたつと、息子は体勢を整え——顎を両手に載せる恰好だ——チェス盤に向かって銃弾のような形をした駒をにらみつけている。うちの小さなカルポフくんだ。息子がチェス盤に向かい、ちっちゃなマスターみたいに読みふけている姿を眺めるのは、私にとって

は、マイケル・ジョーダンが三百六十度回転してシュートをねじ込むのを見るよりも、はるかに興奮する。だがもしかすると、息子は大きくなったら私が嫌いになるかもしれない。将来、息子は自分が七歳の頃、八歳の友達ニッキー・シルヴァーズと早指しをやっていて集中力を切らしたときに、私がなじったことを、精神科医相手にしゃべって何年も費やすことになるのだろうか？

ジョッシュが大会に出る直前になると、もしかして息子はたいしたことがないのかも、あると思っっている才能は、夢想好きな父親がこしらえた空中楼阁にすぎないのかも、という思いが私につきまとう。息子が対局中に、私は本か日曜版の『タイムズ』を手にして読もうとする。新聞を膝の上に乗せたまま、数時間たっても一段落も読めない。頭の中は息子の対局のことで一杯だ。さっき見たときには、ポーン一個損だった。その駒損を取り返しただろうか？ 対局に集中しているだろうか？ ほとんど食べていないんじゃないか？ コカ・コーラを飲みすぎたんじゃないか？ 他の保護者たちも、心配を隠して日曜版を読んでいるふりをしている。子供たちは修道僧みたいにチェス盤の前に座り、部屋一杯になったちっちゃなエラスムスたちが指し手を棋譜用紙に熱心に書き込んでいる。対局が終わると、彼らは礼儀正しい紳士のように祝福の握手を求める。しかし保護者にとっては、緊張感が強すぎて、無関心なそぶりを装う仮面にひびが入ることもよくある。母親も父親も手をもみしぼり、吐き気を催し、身体が震えてくる。額の血管が緊張でピクピクする。ときには他の保護者や大会責任者に食ってかかることもある。

八歳のとき、ニューヨーク市小学選手権の最終ラウンドで、息子は同じジョッシュという名前の

子と対戦することになった。ニューヨーク市で六歳から九歳までの最強者を決めるこの一戦を見ようと、十五人から二十人くらいの保護者や子供たちがまわりに群がっていた。私はとても見ていられなくて、マンハッタン・チェスクラブの階段吹き抜けのところ、赤子をあやしている二人の母親と一緒に立っていた。どうして観戦しないのかと誰かが私にたずねた。「息子が気にするといけないので」と私は嘘をついた。「形勢はまったく互角」と誰かが戸口のところからあわただしそうに声をかけた。「ジョッシユは時間の使いすぎ」どっちのジョッシユだろう？

ある時点で、私はもう一人のジョッシユの父親と視線が合った。彼は知的で、柔和な人間であり、私たちは互いに会釈した。どちらも、ジョッシユという八歳の子が緊張に耐えられなくなって、なんともかわいそうに大悪手を指してしまふのを期待している、というはめになったのを少し悲しく思いながら。この父親は大学時代にはランニングバックのスター選手だった。もしかすると、彼はちょうど今感じているほどのプレッシャーをフットボールの競技場ですら感じたことがないんじゃないかと、ふと思った。あの骨が砕けそうな試合を何度も経験して鍛えたのも、自分の息子が相手の子に読み勝とうとしているところを観戦する、この日のような午後のためだったのかと。

「ジョッシユの時間が切れそうだ」と誰かが大声でうわさした。「ジョッシユが泣いてるよ」と別の子が言った。どっちのジョッシユだろう？

とうとう私は、吹き抜けに立っているのが我慢できなくなり、外に出て近所をぐるっと散歩した。二十分後に戻ってくると、もう大会は終わっていた。表彰式もすみ、私のジョッシユは別の子と冗談を言いながら早指しをしていた。いかにも楽しそうに、指し手の合間に今度また会う約束をして

いる。大会は過去の出来事になっていた。ジョッシュが私と目が合って、大きな優勝トロフィーを持ち上げてみせると、私は部屋のむこうから派手なハイファイヴのジェスチャーを送った。息子は少し恥ずかしそうにしたが、私は平常心でいられたのだから仕方がない。そういう瞬間には、親はまさしく子供になってしまい、栄光と不滅の名声という幻想に酔いしれてまるで馬鹿のように踊り狂う。そしてその思い出を墓場まで持っていくのである。